

20世紀少年〈第1章〉終わりの始まり

2008(平成20)年8月11日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★



第1章

目立ったのは米中合作

監督＝堤幸彦／原作＝浦沢直樹『20世紀少年』（小学館ビッグスピリッツコミックス刊）／
出演＝唐沢寿明／豊川悦司／常盤貴子／香川照之／石塚英彦／宇梶剛士／宮迫博之／生瀬勝
久／小日向文世／佐々木蔵之介／石橋蓮司／中村嘉葎雄／黒木瞳（東宝配給／2008年日本映
画／142分）

……たかがコミックと侮ることなかれ！ 浦沢直樹原作のベストセラーコミックを基に、邦画も徐々に全3部作、60億円の巨大プロジェクトを始動し、遂にその第1章が。「よげんの書」にもとづく、『指輪』も顔負けの（？）壮大な物語と、「ともだち」をキーワードとした人間模様に注目！ もっとも、無事に21世紀を迎えている今の私たちとしては、「よげんの書」の警鐘をどのように受け止めれば……？

壮大な計画の第1章が……

浦沢直樹原作の『20世紀少年』は、『ビッグコミックスピリッツ』に1999年第44号から2007年第33号まで連載された全22巻の超大作で、累計約2000万部を売った大ヒット作。しかし、マンガに弱い私は、例によって全く知らなかった。

プレスシートによれば、そんな人気マンガの映画化が企画されたのは2004年だが、『指輪物語』も顔負けの（？）あまりにも壮大な物語であるため、映画化は躊躇されたい。そんな中、日本テレビがこの大作を3部作で映画化したいと申し出たことによって決まり！

ちなみに製作費は3本で60億円とのことだから、邦画としてはかなりの投資。そして、監督は海外の監督も含めて検討された結果、堤幸彦氏に決定。彼は“「聖書を映画にしてくれ」と言われているぐらいのイメージ”で大プロジェクトに取り組むことに。

ちなみに私は、最近知り合った30歳前の若手税理士と8月10日（日）に映画の話を

していたが、その時「ボクが今一番観たいのは、『20世紀少年』」と聞かされた。折りしも私が試写室に行く前日だ。そんな彼の期待感をひしひしと胸に感じながら、壮大な計画の第1章を鑑賞したが……。

子供たちの空想力がすべての源泉！

空想力豊かな子供たちは、ともだちと一緒に遊ぶ中、さまざまな空想を膨らませることによってどんな冒険でもできるし、どんなヒーローになることもできる。私は小学校低学年の頃、図書館にある少年少女の冒険物語を片っ端から読破したが、『トム・ソーヤの冒険』や『十五少年漂流記』などはその代表格。また最近では映画でも、『あの空をおぼえてる』（08年）や『遠くの空に消えた』（07年）など、秘密基地を中心とした子供たちの空想力をストーリーの土台としたものはたくさんある。

『20世紀少年』第1章の主人公は、20世紀の終わりに悪の組織と闘うケンヂこと遠藤健児（唐沢寿明）を中心とした9人の戦士だが、大切なのは彼らが万博の前年である1969年の夏を過ごしたわんぱく時代。原っぱに秘密基地をつくったケンヂたち9人のともだちは、そこでどんな空想を働かせ、どんな未来を予言したのだろうか……？ 子供たちの空想力が、すべての源泉なのだ。

「よげんの書」がすべての始まり

小学生のケンヂが仲間たちと一緒に秘密基地をつくったのは大阪万博を控えた1969年の夏。それから28年後の1997年。今はロックスターになる夢を諦め、コンビニ経営をしている遠藤健児は、小学校の同窓会に出席してかつての仲間たちと話したり、ドンキー（生瀬勝久）の死亡を知らされたりする中、その生活が大きく変化していくことに。

同時に世界では、恐ろしい細菌兵器がサンフランシスコとロンドンを襲い、次には羽田空港が大爆破。これはかつてケンヂが書いた「よげんの書」とそっくりではないか……。そんな風を感じたケンヂはある日、土の中に埋めてあった「よげんの書」を手に入れることに。その「よげんの書」は私がもらったプレスシートの中にそっくりそのまま入っているから、映画公開時のパンフレットにもきっと載っているはず。ケンヂが小学生の時に書いたこの「よげんの書」が、すべての物語の出発点となる。そこには、世界中が期待感をもって迎えるはずの21世紀直前の2000年12月31日、東京

に現れた原子力巨大ロボットが細菌をばらまきながら、破壊の限りを尽くすと書かれていたが……。

キーワードはともだち！ シンボルマークは？

近時多発しているキレた若者たちによる大量無差別殺人事件の原因の大半は、孤独感と疎外感。もし彼らにともだちがいれば、こんな犯行に走らなかつたはず……？

その点、ケンヂたち9人の仲間とはもだちで囲まれ、連帯感に満ちあふれていたが、ヤン坊・マー坊の双子の兄弟をはじめ、ケンヂの同級生たちの中には、ともだちになれず1人孤独感にひたっていた奴もいたのでは……？

ちなみに、ともだちの連帯感を強めるためには旗をつくったり、シンボルマークを定めるのが有効。それは政党をはじめ、あらゆる組織や集団を見れば明らかだ。しかして、ケンヂたちが定めたシンボルマークとは……？ 21世紀に入って7年も過ぎた今、あらためてともだちをキーワードとした壮大な物語を大展開するのは、ある意味できわめてタイムリー？

カルト集団が生まれるのは？

他方、かつて猛威を振るっていたオウム真理教をはじめとするカルト集団が、不安な時代状況になるにつれて活動領域を広げていくのは当然。したがって、何ゴトも前向きで、多くの日本人が将来の夢を持っていた大阪万博が開催された1970年当時はそんなカルト集団は少なかったが、ケンヂが大人となり、20世紀も終わりに近づいた1997年になると……。

今、巷では「ともだち」と呼ばれる教祖と彼が率いる怪しげな教団が出現。ひょっとして、ドンキーの死亡はこの「ともだち」集団のせい……？ そう考えたケンヂは、「ともだち」が主催するロックコンサートに紛れ込み、教祖と「対決」しようとしたがあえなく敗退。さて、この「ともだち」なるカルト集団が目指すものは……？

2008年8月の今、福田総理が8月1日に内閣改造を断行したことによって、当面の衆議院解散・総選挙はなさそうだが、来年9月の任期満了までのある時期に総選挙は必至。「ともだち」によってケンヂたちは今テロリストの汚名を着せられたうえ、万丈目胤舟（石橋蓮司）率いる「友民党」は、ナチスドイツがかつて1933年の総選挙で大躍進したのと同じように国会へも進出。さあ、こんな風に日本国を暗い影が襲

っている今、「よげんの書」が書いていたように2000年12月31日に原子力巨大ロボットが東京に姿を現したとしても不思議ではないが……？

『ハリー・ポッター』シリーズにかわって、大ヒットの予感……？

『20世紀少年』第2章のハイライトは、ラスト近くになって東京に突如現れた巨大ロボットとケンヂたちとの対決。細菌をばらまきながら歩する巨大ロボットの全貌に興味津々だが、その内部に入り込んだケンヂはいかにそのロボットと戦うの？

もっとも、そのロボット自体が問題なのではなく、真の敵はそれをコントロールしている悪の組織のボスで（らしい？）、いつもお面をかぶっている忍者ハットリ君……？

少年の空想力から生まれた奇想天外な物語を全3部作で構成するためには、どうしても全体の導入部が必要。そのため第1章は、2時間22分の長尺となってしまったが、それは仕方がない……？

映画の後半は、タイのバンコクから戻ってきたオッチョこと落合長治（豊川悦司）や、紅一点のユキジこと瀬戸口雪路（常盤貴子）らが登場し、ケンヂと共に第2章以降の活躍を予感させてくれる。また第2章では、ケンヂの姉キリコこと遠藤貴理子（黒木瞳）の娘であるカンナが今後重要な役割を果たす予感もはっきりと……。ハリウッド大作として人気を集めた『ハリー・ポッター』シリーズにかげりがみえてきた今、『20世紀少年』全3部作は『デスノート』前編（06年）、後編（06年）以上のヒットが期待できるのでは……。

2008(平成20)年8月14日記